

は利他の精神があると思います。
七月四日(土)午後、第百六回の塾を開きました。

最初にコロナに関連して、フランスの経済学者ジャック・アタリ氏の意見、「人類が感染症や気候変動の脅威からの生き残りを望むなら、利己主義でなく、利他主義が自身の利益になることを意識すべきであろう」を紹介しました。

『中庸解』第二十章の続きです。大意は九経を行う方法について「①身を修める・・・衣服を正し、五事を正して純一の本心に復る、②賢臣を尊ぶ・・・良知に至れば巧言や美色や貨財に惑わされない、(中略)③諸侯を懐くる・・・各地域の責任者の事情に合わせて待遇する。これらの実行は中庸の本体である愛敬の心を用いることである」。

フリートリーキングでは、「九経を行う根本は『誠』だと分かった」、「学び続けることが大事だと再認識した」、「頭を使う楽しさ、素晴らしさを感じる充実した時間を持てた」等の意見を頂きました。

八月二日(日)午後、第百七回の塾を開きました。

今回は『中庸解』第二十章の続きです。大意は「およそ物事は何事によらず予め準備をすれば成立するけれども、それをしなければ失敗するものである。誠はすべてのものの根柢であるから、人は何事においても

発言や行動を発する前に誠の心で省察しなければならぬ。下位に在つて上の信任を得られなければ民を治めることができない。上の信任を得るには、朋友に信じられねばならぬ。(中略)すなわち五事を正して身を誠にすることが肝要である」。

ここで、「致知」に掲載された「お釈迦さまが説く成功の要諦」により話を補強しました。釈尊は人間として全面的な成功をするために六方(自分の周りの人々)への礼拝を説かれていますが、その前に殺生等の悪い行為を止め、欲などの心の汚れを落とすことが必要と言われています。そして六方へのお勤めができる人は自動的に社会のリーダーになる、と説かれています。儒教も仏教も人生で大事なことの教えの本質は変わらないということです。

フリートリーキングでは、「この塾で『中庸』を学んで、自分ならどう解釈するかのヒントが得られる」等の意見を頂きました。本塾に関心のある方は是非お越しください。心からお待ちしています。

藤樹人間学塾 今後の予定

九月十九日(土)、十月三日(土)

十一月七日(土)、十二月五日(土)

■日時 (原則) 十五時～十七時

■場所 (原則) 安曇川公民館

「藤樹紙芝居」の紹介⑬

『熊沢蕃山の入門』

(解説)

熊沢蕃山は、京都で生まれました。八歳の時、母方の祖父である水戸藩士の養子になり、熊沢姓を名乗って少年時代を水戸で過ごしました。貧しい浪人一家が生きるための選択であったと考えられています。

十六歳で備前藩主池田光政に仕えましたが、四年後には自らの未熟さを思い、修業のため職を辞して実家の家族が身を寄せる近江の桐原に戻りました。この紙芝居は、蕃山が修業のために職を辞し学徳優れた師を求めるところから始まります。「我が師は、中江藤樹先生」と決めて、ようやく入門を果たします。対面して学んだ期間は、わずか八ヶ月足らずでしたが、その後は書簡を通して師弟関係を続け、大きな影響を受けました。

再び光政に仕えた蕃山は、学問で得た知識や精神を生かし、藩民の福利を重視した治水事業等の藩政に業績をあげました。陽明学の研究の開祖と言われた藤樹先生は、「知行合一」の精神を重視しました。熊沢蕃山は、江戸時代初期、その精神を藩政に生かした第一人者と言えます。備前藩を辞した蕃山は、陽明学を中心に学問を深め、学者として多くの書物を書き著しました。

▼参考文献

- ・ 児童用副読本『藤樹先生』(編集・発行 高島市教育委員会)
- ・ 『熊沢蕃山その生涯と思想』吉田俊純著 (発行: 吉川弘文館)
- ・ 『熊沢蕃山』さいわい徹脚本・画(編集・発行: 安曇川町・同教育委員会)

(紙芝居)



① 蕃山は、子どものころから学問が大好きで、いろいろな本を読んでいた。十六歳の時、備前の藩主・池田光政に仕えました。数年たった時、光政は蕃山に大切な仕事をさせようとしました。

光政「私は、だれもが安心して暮らせる備前藩にしたい。そのために力を貸してほしい。」

蕃山「殿様、ありがたいお言葉ですが、私がりっぱな仕事をするには、学問と心の修業が必要かと思えます。どうか、私にしばらくおひまをください。」

こうして、蕃山は城づとめをやめて家族の住む近江の桐原に帰りました。

② (半分まで引く)

桐原にもどった蕃山は、一人で学問に励みました。しかし、思うように進みません。

蕃山「ああ、難しくて何度読んでも解らない。京都に行って良い先生をさ